

聖書日課 『からし種』 2025.7.13-7.20

<p>7月13日 (日)</p> <p>Ⅱコリント 2章</p>	<p>「あなたがたは、その人が悲しみに打ちのめされてしまわないように、赦して、力づけるべきです。…ぜひともその人を愛するようにしてください」(7-8節)。教会に悲しみをもたらした人を巡るパウロの言葉。彼の最大の関心は、私たちの言動がキリストの愛、赦し、慰めに基づいているかどうか。「私たちの基(もと)はキリストなり」の告白に今日建てられていこう。</p>
<p>14日 (月)</p> <p>Ⅱコリント 3章</p>	<p>「わたしたちの推薦状は、あなたがた自身です」(2節)、「生ける神の霊によって…人の心の板に、書きつけられた手紙です」(3節)。「パウロはキリストの弟子でもないのに使徒を名乗る資格があるのか?」という非難を受けていたパウロにとってコリント教会の存在が大きな慰めと励みだった。「教会」は神の霊が書きつけた言葉があふれている「手紙」なのだ。</p>
<p>15日 (火)</p> <p>Ⅱコリント 4章</p>	<p>「わたしたちは…行き詰らず…失望せず…見捨てられず…滅ぼされない」(8-9節)。「四方から苦しめられ、途方に暮れ、虐げられ、打ち倒されても!」。わたしなら、この四つの状況のうち、たった一つのことでも音を上げてしまいそうだ。「もうこんな状況いやだ。勘弁してくれよ」と。しかし、パウロはそのような危機にこそ、キリストの恵みは生きて働くことを教えてくれている。</p>
<p>16日 (水)</p> <p>Ⅱコリント 5章</p>	<p>「わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物(天にある永遠の住みか)が備えられていることを私たちは知っています」(1節)。「死ぬはずのものが命に飲み込まれ」(4節)、天にある永遠の住みかですとまみえる日を心に思い描きながら、パウロは「和解のために奉仕する任務」(18節)に専心した。私たちは何に専心しているだろうか。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.7.13-7.20

<p>17日 (木)</p> <p>Ⅱコリント 6章</p>	<p>「わたしたちは…悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のように、すべてのものを所有しています」(10節)。第二コリントの手紙ほど、パウロの心に生きる十字架のキリストの力が証しされている手紙はない。もし人びとの無理解に心折れ、悲しみに打ちのめされ、すべてを奪われた時には、このパウロの言葉を繰り返し読もう。</p>
<p>18日 (金)</p> <p>Ⅱコリント 7章</p>	<p>「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします」(10節)。コリント教会の実情を聞いて心痛めたパウロが愛をもって書いた言葉が人びとの心に届いた時、そこにキリストが働いてくださった。「神の御心に適った悲しみ」とは、キリストの心にふれる悲しみ。その悲しみは私たちに救いに導く。</p>
<p>19日 (土)</p> <p>Ⅱコリント 8章</p>	<p>「すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」(9節)。飼い葉桶に生まれ十字架に向かわれた主の足跡には、私たちの貧しさをご自分の貧しさとしながらも、天に向かって喜びの賛美をささげ、人々と安らぎを分かち合っていた主の微笑みが刻まれている。</p>
<p>20日 (日)</p> <p>Ⅱコリント 9章</p>	<p>「つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かないものは、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。」(6節)。わたしたちが蒔くみ言葉の種は、「種を与え、パンを糧として与えて」くださる方により、「慈しみが結ぶ実を成長させて」(10節)いただける。自分の思いや力に頼るのではなく、主に信頼して、蒔き続けよう。</p>